マジンタナカ

桜井友和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マジンタナカ

【Ｎコード】
Ｎ３２３７Ｔ

【作者名】
桜井友和

【あらすじ】
マジンタナカがマジンタナカになる話。マジンタナカはマジンタナカになる前は、田中マモルといって、スーパーでアルバイトをしていた。誘惑に負けて、気がつくと、閉じ込められていた。壺の中に。マジンタナカを解放した女子高校生は、マジンタナカに願い事を頼もうとする。

マジンタナカ（1）

マジンタナカはマジンタナカになる前は、田中マモルと言った。というか、マジンタナカはマジンタナカになってからも、自分が田中マモルだと言い張り続けた。

田中マモルはマジンタナカになる前は、スーパーでアルバイトをしていた。主に清掃の仕事をしていたのだが、ある日、レジ打ちのアルバイトをしている松前さんに誘われたのだった。

松前さんは三十歳半ばほどの、長く、艶やかな黒髪を持った女性である。とりたてて美人ではないが、どことなく妖艶な印象があり、特に、にやっと笑うと、何とも言えない色気が漂うのだった。

とは言うものの、田中マモルであった頃のマジンタナカは別段、松前さんを意識していたというわけではない。ただ、あの日は雨が降っていたから。それがすべての始まりだった。

田中マモルは、アルバイトを終え、スーパーの裏口を出ると、舌打ちした。手のひらをかざすと、ぱらぱら雨粒が降りかかるのが分かった。

スーパーから、自転車で15分ぐらいのところに田中マモルは住んでいるのだが、家を出る時は雨など降っていなかったのだ。くもり空で、あやしい天気だったのだが、おそらく大丈夫と思って出てきたのが失敗だった。

しかめ面の田中マモルの目に、赤い傘が飛び込んできた。傘はくるくる回っていた。田中マモルが見るともなしに見ていると、赤い傘の下から、黒く、長い髪が見えた。きっと松前さんに違いないと田中マモルは思った。

それはともかく、雨をどう対処しようかと考えた。ポケットの中からタバコを取り出したが、いつの間にか最後の一本を吸い終わってしまったらしく、タバコは入っていなかった。

田中マモルは、タバコの箱をくしゃっと握りつぶした。そして顔

をあげると、目の前に松前さんが立っていて、びっくりした。
「あがり？」
松前さんが言った。雨のせいか、ひどく湿った声だった。
「あがりです」
「降ってるね、雨……」
「ええ、そうみたいですね」
松前さんは、田中マモルの全身をきょろきょろと見回して、にやっと笑った。松前さんはいつもにやっと笑うのだ。それから、髪をかきあげた。
「はいってきなさいよ、傘。いれてあげる」
「いや、でも自転車なんで、すぐ帰って、風呂に入るから大丈夫です」
「塗れちゃうわよ。マンホールとか、すべりやすくなってるわよ。あぶないあぶない」
「ええ……」
そうして、気がつくと、田中マモルは、松前さんのアパートの部屋の中にいた。塗れちゃったなら、シャワーを浴びなさいと松前さんは言った。田中マモルは、シャワーを浴びながら、どれがシャンプーでどれがボディーソープだろうと考えた。
陰部を丁寧に洗っていると、すぐ勃起してしまった。この後どうなるんだろうと田中マモルは考えて、そわそわした。部屋にわざわざ入れたってことは……。がさりと外で音がした。タオルと着替え、ここに置いておくわね、と松前さんが言った。田中マモルはびくっとなって、ええ、ありがとうございます、と答えた。田中マモルの声は風呂場でやけに響いた。
田中マモルがシャワーからあがって、用意されていたTシャツとスウェットを着た。服が乾くまでうちにいたらいいわよ、と松前さんは言う。そして松前さんもシャワーに入った。
田中マモルは、用意された麦茶をぐびぐび飲んだり、窓の外を眺めたり、本棚を見たりした。勃起はなかなかおさまらなかった。や

がて松前さんがシャワーから出てきた。
「雨っていやね」
松前さんはそういって、黒くて長い髪をバスタオルで拭いた。
「ええ……」
「麦茶もっといる？」
「いや、ああ……、ええ」
「ふふっ、どっち？」
「ああ、じゃあいただきます」
松前さんが髪を乾かしている間、部屋には奇妙な沈黙が満ちた。
田中マモルはどきどきして、麦茶ばかり飲んだ。
松前さんもTシャツ姿だったから、ちょっと動くたびに豊満な胸がゆらゆら揺れた。首もとが開いているので、胸の谷間が見えた。
田中マモルは麦茶ばかり飲んだ。
乾燥機ががたごとと鳴っている。
「働きだしてどのくらいなの？　スーパー」
「えっと、半年くらいです」
「楽しい？」
「ええ……、まあ、楽しいです」
「楽しいわけないわよね？」
「いやあ、まあ、仕事ですから」
「普段は学生さん？」
「まあ、そうですね。はい」
「いいわねえ」
「ええ……」
重苦しい沈黙。田中マモルは、何かを話そうと思って、天井を見上げた。それからしばらく考えた。
「あの……」
「なあに？」
「松前さんはどのくらいですか？　スーパー」
「ふふっ、そんなこと興味あるの？」

「いや、あの……」
松前さんが座ったまま、すっと田中マモルに近寄ってきた。畳がみしみしと鳴り、シャンプーのにおいが田中マモルの鼻先をかすめた。松前さんは、田中マモルの手をとって、
「触ってもいいわよ」
と言った。松前さんの手はあたたかかった。
「えっ？　触るって……」
次の瞬間、田中マモルのてのひらは、柔らかいものをつかんでいた。そして、熱く固くなったものに、松前さんの手がのびた。あっと叫んだ田中マモルの下唇を、松前さんが噛んだ。2人はどたりと倒れた。松前さんの黒くて長い髪の毛が、田中マモルの顔にばさばさっと降りかかった。
松前さんは田中マモルのTシャツをぬがせた。田中マモルは、いつの間にか汗だくだった。興奮した田中マモルが、松前さんを押し倒そうとしたその時、がちゃがちゃっという音がした。
「あっ、いけない」
松前さんが飛び上がった。そしてテーブルの上のものを、慌てて片づけ始めた。
「はやく、隠れて」
「えっ、あの……」
「シーッ、静かに。そこの押し入れに入って。声立てちゃダメよ」
「ええ？」
「あの人が帰って来ちゃったみたい」
「あの人？」
がちゃっ！　がちゃがちゃっ！！
田中マモルは、押入れの中に飛び込んで、扉を閉めた。段ボールの角がわき腹にぶつかった。なにかがくずれてきたようだ。右手には人形らしき、やわらかいものがある。
押入れの中は真っ暗だった。部屋の物音は、ほとんどなにも聞こえない。不自然な体勢だったが、身動きするわけにはいかない。ま

た何かがくずれていきそうだったから。
　田中マモルはそのまましばらく待った。いつまでここにいればいいのだろう？　心臓の動悸がおさまるとともに、勃起もおさまっていった。落ちついてくると、押入れの中はひんやりと冷たく感じられるのだった。
　少しは光が射し込んできてもおかしくないし、薄い扉一枚だから、音が聞こえてきそうなものだが、真っ暗だし、何も聞こえなかった。
　しつけのよい犬のように、待てと言われた田中マモルはひたすら待ち続けた。どのくらい待ったのか田中マモルですら分からない。様々な考えが浮かんでは消えた。そしてやがて、田中マモルは決意した。
　家に帰りたい。ただそれだけだった。「あの人」に殴られても、結局はなにもしてないわけだから、許してもらえるかもしれないし、ずっとここにいるわけにはいかないではないか。
　出ていこうと田中マモルは決意したのだが、それでもしばらく、扉があくのを待った。大分待った。そしてようやく田中マモルは扉をあけようと手をのばした。しかし、手を伸ばした先はつるつるしていて、どこにも扉らしきものはなかった。
　田中マモルはパニックに陥って、足で蹴ってみた。ゴオオン、ゴオオンと鐘のような音が響いた。それだけだった。いつの間にか田中マモルは閉じこめられてしまっているのだ。わめいたり、叫んだり、叩いたり、蹴ったりしてみたのだが、すべて無駄なことだった。
　それから田中マモルは、そこにどのくらいいたのか分からない。不思議なことに、おなかもすかないし、トイレに行きたくもならないのだった。ただひたすら色々なことを考えた。
　一人で延々しりとりをしてみた。同じ言葉を2回言ったかどうかすら覚えていない。しりとりは終わりが見えず、いつも曖昧なまま終わった。
　長い長い歳月の果てに、突然、頭を引っ張られるような感覚があった。そして、ジェット・コースターの一番高いところから、一気

に急降下する感覚。田中マモルは、スポットライトのような明かりを感じた。
田中マモルは部屋の真ん中に、大の字の形で出現した。ぼん！
そしてそのまま、床に落ちた。ぎゃあああ！　という叫び声があがった。
田中マモルが、起きあがって、悲鳴の発生源を見ると、女子高校生とおぼしき女の子が青ざめた顔で口元をおさえている。
田中マモルは上半身裸で、下は簡単なスウェットなだけだったから。
「だだだだ、誰？　おかあさーん！　おかああさーん！！」
「ちょ、ちょちょ、静かにしろ！」
田中マモルが女子高校生の口元を押さえようとすると、女子高校生は、がぶりと手を噛んだ。痛くもなんともなかった。女子高校生もきょとんとした顔つきをした。なんだか変な感触がしたのだろう。
田中マモルは自分の手を見た。なんだか風船のようにぷくぷく膨らんでいるのだ。こころなしか地面からも浮いているようだ。
「あっ！　やった！！　ついに見つけたんだ。わたしすげー！！」
「は？」
「この喜びを誰に伝えたいですか、沙紀さん。ええ、児島先輩に伝えたいです。児島先輩やりましたー！！」
「なに一人で言ってんの？」
「ついに見つけた。あなた、マジンタナカでしょ？」
女子高校生はきらきらした目で田中マモルを見た。
「いや違うけど」
「またまたまた〜。だって、あなた壺の中から出てきたんだよ。マジンタナカじゃん」
「壺から出てきてないよ」
「ね、早く、例のを言ってよ」
「えっ、なになに？」
「ほらほら、とぼけないの！　３つだけ願いを叶えようってやつよ

！！」
「叶えないよ」
「1つ目の願いでさ、願いを増やすってのは、やっぱりダメよね？
きゃーっ、どうしよう、何から願えばいいかしら？」
田中マモルはやれやれと思いながら、辺りを見回した。マンションの一室のようだった。部屋には人形や、ピンク色の雑貨が数多く置かれている。壁にはアイドルグループのポスターが貼られていた。
「ちょっと、マジンタナカ、聞いてるの？」
「いや、おれ、帰る」
「なんでや！！　わたしの願い事はどうすんの？」
「叶うといいね」
田中マモルは、ふわふわ歩きながら、マンションの廊下を歩きだした。次の瞬間、エレベーターに乗っている感覚に襲われた。気がつくと、いつもの暗闇の中にいた。壁を蹴ると、ゴオオンと鳴った。なるほど、たしかに壺の中にいるらしいと田中マモルは気がついた。
しゅっ、ぽん！　部屋の真ん中に田中マモルが大の字で出現した。
「怒るよ、マジンタナカ！！」
どうやら、この女子高校生が見せしめのために、田中マモルを壺に一度戻したらしい。どうやったかは分からない。
「もう怒ってんじゃん」
と田中マモルは言った。こうして、田中マモルはマジンタナカになったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3237t/

マジンタナカ

2011年5月16日19時25分発行